〔館員随想〕

〝花の美術展〟を終えて

初夏の花の季節に合わせて、本年５月18日から７月１日まで、当館は平常展として初めて〝花の美術〟展を行いました。

このような漠然としたタイトルは皆様にどのように受け取られるかと少々不安でしたが、予想以上に多くの方々に御来館いただき成功裡に幕を閉じることが出来ましたことを、担当者としてもここに誌上をお借りして御礼申し上げます。花は誰の心をも癒し、自然回帰の時代と言われる昨今の人々の要請にマッチした企画だったと言えましょうか。

今日は、初めての展覧会の工夫やそれに対して得られた来館者からの感想などを御紹介して、次回（来年）への御誘いといたしたく思います。先ず、展覧会の作品は、絵画、陶磁、漆工、金工、染織、硝子と多岐に渡り、中国・朝鮮半島・日本に少しばかり欧州の品々を含め、時代は朝鮮半島・古新羅の金銅薬師如来立像の７世紀が最も古く、新しくはチェコスロヴァキアの菊形切子硝子大鉢の19世紀までに及びました。作品選定には花の画題あるいは文様を持つ200点ほどの作品の中から、花の形が明確で、その名前を特定できるものに限って約半数に絞りましたが、花を四季の順に並べる為にどうしても落としたくないものが多々あって、合計117点と少々多数になりました。それらを国やジャンルにこだわらず四季を追って展示すると、特に各種工芸品は漆工の次に陶磁、硝子、染織といったように、また、国も日本・中国・欧州・朝鮮半島などと入り混じることになりました。しかし、このような展示の仕方も、工芸技法や国の違いによって同じ花の表現がどのように異なるかという比較鑑賞が出来、いつもとは少し変った展示として楽しんでいただけたように、結果としては思われました。

中国は富貴の花の牡丹、朝鮮半島は豊穣のシンボルである葡萄、日本は日本人の心情を表すとされた秋草を多く描いていることも示しました。そのような花の意味が重要なので、一枚刷目録では末尾にその代表例を記し、各作品毎に描かれている花の種類を記すことも試みました。また、室町時代の立花伝書に始まる生花文様のコーナー、夏の花の蓮華、冬の花の梅もそれぞれコーナーを設け、その工夫を担当者として楽しみました。

団体の方々は平均50名が10数組御来館下さり、近くの小学生の団体もお招きして、今回初めて作ったワークシートを用いながら見ていただき、多くの入場者数となりました。その中で、筆者が非常勤講師として博物館学の講座を受け持つ大学の学生諸氏には、授業の一環として見学してもらい、感想文を書いてもらいました。今日は、最後にそれを総括して御披露しようと思います。

先ず、当館の立地条件についてです。駅からもほど良い距離で、道の両側には緑が多く丁度良い散歩道だ。美術館は深い緑に囲まれ、小高い山あり池ありと様々な自然の中に位置している。建物も和風で周囲の緑や土地柄に合い、展示場の作品にある花が庭にも咲いている（萱草、紫陽花、桔梗など）。庭も美しく演出されているかのようで、展示場と庭と両方が楽しめて素晴しい。ウグイスの声さえ聴こえた。建物までの坂を登っていると緑に包まれて心が落ち着き、いつもの騒々しい気分から作品を静かに見る気分へと変って行ったように思われた。庭に石が敷きつめてあり、建物も変わっていて、どこか違った世界にいるような優雅な気分になった。久し振りに自然の中で土の匂いを嗅いで気持が良かった。展示場内の竹（四君子の一）の庭も和風で、その間から見る作品の美しさにも感動した。

展示については、季節順に並べてあり、花を知らないものにもどの季節の花かが分かって良かった。描かれているもの（花や魚）の意味がパンフレットに書かれていたので、それを見ながらより興味を持って展示品を一周することが出来た。この作品の並べ方は素晴しかった。全体に見ごたえがあり、〝美術館とはこういうものなのか〟と思った。「美術館」のイメージは今まで堅苦しいものだと思っていたが、そんなことはないのだと気づいた。

その他、ロビーが広くてゆっくり休憩できる。展示ケースの内と外にある温湿度計や、ブラインドで調整する明るさに細やかな気配りが感じられる。皿立てや鏡なども人の視点に合うように工夫されて置かれ、敷布の配色も良く考えられていた。作品の角度をそれぞれ変えて見易くしており、安全の為に作品を透明なテグスで止めていた。解説は丁寧な言葉で行い、誰でも理解できるように話さなければならないのだと思ったし、スタッフは爽やかで対応も気持良く、しっかり教育されていると思った。

日曜美術講座で蓮がエジプトの古代から用いられて来たことを知って驚いた。蓮が用いられている各地の仏像をプリントで見て、蓮の花は生命を象徴する素晴しい花だと思った。（筆者の手前味噌ですみませんが）花の美術展に合わせて解説する先生も花柄のスカートを着ていたのはさすがだなと思った（男子学生）。この他、当館の改善すべき点への厳しい指摘もありました。砂利道やトイレまでの階段は車椅子の人には一人で来られずに不便。

以上は若い、美術館をゆっくりと回ったのは初めてという人も含めての感想ですが、館員にとっては励まされ参考とすべき言葉です。美術鑑賞歴の永い大人の方々にも同様な感動を与え続けることが出来るよう努めて行きたいと思います。

この展覧会のきっかけは福岡市美術館との交換展の折り、1997年１月に当館の案内として、「花々と古美術－大和文華館への誘い」と題して筆者が同美術館で講演し、所蔵品にも文華苑にも同じ花が咲いていること紹介したことにあり、更にそれが一昨年の40周年記念〝（文華苑の）花の写真パネル展示〟に発展し、次いで今回の展覧会となったものです。来年度は更に、文華苑の梅林の賑わいに合わせて〝梅の美術〟展も予定しています。

庭にも作品にも花が咲き、当館が50年後100年後にも〝花と栄える〟ことを願います。

（学芸部次長　村田靖子）

蒔絵椿紫陽花文提重 江戸時代

竹の庭越しに展示場を見る

季刊 美のたより №136
平成13年10月13日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.